

## 憶々戦争<sup>あ</sup>

愛知県 小林 詮 一

私は昭和十六年兵で、同十七年一月十日、守山中部隊第六部隊（守山騎兵三連隊）に満州要員として入隊しました。中隊長は鷺津中尉、教官は近藤少尉、班長は鶴田軍曹でした。

寒い季節であります。帝国軍人という自負心で寒さは感じません。起床ラップで起こされて営庭で点呼、天突き体操、厩舎へ突撃、軍馬の手入れ、寝蓐の取替え等、目の回る忙しさ。総てが終わると、我々の朝食であり、この食事もだれよりも早く終わらせて、先輩の食器洗いや掃除などを済ませて演習という日課の連続でありました。

乗馬訓練、徒歩訓練、防毒訓練等戦闘に関する演習が続き、一期の検閲まで無我夢中で過ごしました。検閲の終わるころ、出陣の話があり、四月の桜の咲き始

めたころ、お世話になった先輩の見送りで勇躍、六部隊の営門を出発、瀬戸電で名城下の駅に着き、隊列を組んで御幸本町から桜通りを歓呼の声に送られて名古屋駅に着きました（道中、私の兄・第一乙種、が送ってくれました。昭和十九年召集でフリーピンで戦死しました）。乗車して汽車の窓から日の丸の旗を振り、万歳を叫びましたら憲兵が歩み寄ってきて、極秘に出発するのには何かと小言を言われた覚えがあります。

博多港より乗船、荒れ狂う玄界灘を敵の潜水艦の攻撃も受けず無事釜山に上陸、西面兵舎に集結し、旅装を整えて貨物列車に分乗、身動きできないほどに積み込まれて朝鮮半島を縦断し、一路満州へと出発。軍務地は奉天省鉄嶺とのことで、輸送指揮官は大塚主計大尉で、私どもの指揮は中村軍曹（滋賀県）でした。

鉄嶺は日露戦争で有名な敵中横断三〇〇里という建川斥候の敵情偵察地の龍首山の麓にあり、工兵隊や弾薬庫もあり、私どもの部隊は六八九部隊であり、連隊長は尾方始郎大佐、中隊長は林忠弘大尉、小隊長は嶋田駿司少尉、班長は中村健蔵軍曹で、部隊は一中隊、

二中隊、機関銃中隊、通信隊の四個中隊でした。

私は連隊中でも優秀な中村軍曹の班に配属となり、日夜軍務に精励することができました。関東軍の大演習には嶋田小隊長の当番として斥候に伝令に夜間演習に活躍したことが昨日のように思い出されます。

日ソ不可侵条約により戦雲は南方に移り、満州の部隊は徐々に南方へ移動が始まり、我々六八九部隊（騎兵二十九連隊）も毎日のように転属があり、昭和十九年の初めごろ、私にも転属の命令がありました。錦州第二十七師団司令部へ十一名が鉄嶺を後にしました。錦州で編制された第二十七師団が河南作戦、いわゆる京漢線打通作戦が開始されたのが三月ごろであったと思う。司令部が錦州を出発、黄河の手前清化鎮から戦闘体系となり、各部隊を黄河の北西に布陣させ、南岸の河南省鄭州洛陽の攻撃準備態勢となり、四月下旬、星明

かりの黄河を、私は息を殺し神を念じ、渡河の先陣に踏み出した。

橋は工兵隊の鉄船と筏を繋いだ浮き橋で、歩くと揺れ動き、馬の手綱を握り締めてゆつくりと馬を驚かせ

ぬよう細心の注意を払って渡った。がついに黄河のながれを見ることはできなかった。先に鄭州を攻略して許昌に進撃中、四月二十九日の天長節（現みどりの日）を迎え、我が小隊は騎乗抜刀し、皇居を遙拝した。我々の任務は師団長閣下の護衛と伝令騎兵（伝騎）が主任務であるが、もちろん、戦闘にもその機敏さが要求されている。

許昌城攻略は五月初旬、続いて鄭城攻撃であるが、このころより連日雨降り続きであった。西平、遂平の残敵を排除し、確山に着いたのが五月九日ころであった。泥道と濡れた被服は体の芯まで通り、寒さと疲労に落伍する兵もあり、後続の輜重隊は輜重車を牛に挽かせての行軍であり、苦難は格別であった。しかし輜重隊のみならず司令部をはじめ師団全体が降り続く雨に多くの被害を被った。特に長台関の悲劇は現世の生き地獄であった。我々兵隊には作戦計画は何も分らない、ただ命令のままに行動するのみであった。長台関には川幅が約五〇メートルぐらいの川があり、この鉄橋が一部敵に破壊されて通行が困難となり、後続の

各隊が橋の手前で停滞し、收拾のつかない混乱となり真つ暗闇の豪雨の中の渡橋であった。

このままでは進退極まって人馬共に倒れてしまうと林軍曹の命令で乗馬小隊は増水した川に飛び込んで対岸へ渡り、狭い田圃道を引き馬して小さな部落へ入ったが、途中、田圃道から後ろ足を落した乗馬が底なし泥のような田圃へぐんぐんと沈んでいく。兵隊が大勢で助け出そうと懸命に努力するが、馬がもがけばさらに沈んでいく。真つ暗闇の中での救出作業であった。最後には大きな戸板を持ってきて、この上に前足を乗せ、助け出しに成功したが、そのころには夜も明け始めたころであったと思う。

悪夢の夜が明ければ、連日の雨と泥沼の道の行軍で、体力のない兵隊は輜重車の上で寝たまま死んでおり、その数は、当時の話で五〇〇人ぐらゐと聞いた。実に哀れな戦死であった。長台関の悲劇を後にして京漢線の路盤を行軍、大別山脈を越えて信陽へ着いたのが五月の中ごろであったと思う。

信陽から貨車輸送で漢口まで、漢口では次の作戦準備

で南下するであろうと察せられた。五月下旬、対岸の武昌へ渡り、湘桂作戦が展開された。現在までの車両部隊は駄馬部隊に編制され、道路のないところも行動できる。食糧の補給はないということであり、今後には総て現地徴発であり、馬糧は粃と青田刈りで凌がざるを得ないのである。

武昌飛行場は敵の爆撃ですべての機能を失ってしまい、師団は六月末ごろより湖南省瀏陽、醴陵、萍鄉の戦闘に入る。粵漢線の切断された路盤に橋を架けたり、下がったり上がったりしての戦線の苦闘であった。

中支戦線で、前線大隊への伝令任務を私は単騎で山の道路を目的の大隊へ走らせていたが、前方に約二十人ぐらゐの便衣隊が隠れるようにして待ち伏せしているのが見え、取り囲まれれば終わりであり、危険を感じ、反転し乗馬に拍車を当て危難を乗り越えた。その後は同年兵の長森兵長と二騎で行動し、前線大隊との連絡に努めた。また、夏の暑い日であった。前線大隊本部に着き、任務を済ませて馬の水飼いをしていたと

き、急に間近で銃声が聞こえたので飛び出して現場へ急行したが、分哨の兵は跡形もなくびっくりしました。大隊では本部を中心に分哨が数カ所設置されて万全の態勢であつても便衣隊は農民との区別が分からないためであり、連れ去られた歩哨は哀れである。

地名は忘れたが、日中の行軍のとき、敵機の空襲があり、それも山岳地帯の一本道で、我々騎兵は如何ともし難く手綱を握り締め、敵機の退散を待つばかりであつた。さらに敵機は一列縦隊の師団を銃撃し、落下傘爆弾を投下し、飛行機の窓から顔を出して笑いながら飛び去つていった。実に口惜しい限りであつた。

万洋山系の禿山の頂上で大休止となり、飯盒炊事とすることに焚き木はなく、水はなく、馬の水飼いもできず、途方に暮れたが、互いに助けあつて過ぎした苦しい出である。万洋山系は湖南省から江西省の山岳地帯であり、遂川飛行場攻略への山岳道路である。この遂川飛行場を攻略し贛州飛行場の攻略に向かうか、これは無血占領であつた。

昭和二十年三月ころ、贛州を出発、惠州に向けての

進軍であつた。前衛部隊は茶陵で激戦中であり、司令部が茶陵の手前緑田に着いたのは八月の中旬か下旬であつたと思う。この緑田で同年兵の内田君が戦病死した。さらに馬関係の兵に回帰熱が発生したが、軍医の投薬により全員回復した。しかし今度は回虫による被害が、薬もないので「せんだん」の皮を煎じて虫下しとした。しかし、この煎じ薬も濃いと神経麻痺、薄いと効果がないとのことであつた。私は緑田から隊長、腰巻大尉の当番を命ぜられました。

昭和二十年三月、曲江、四月には惠州に到着、惠州では約一カ月半ぐらい駐留した。この間、活兵器である軍馬の手入れ、運動など、次の戦闘準備であり、四月の快晴のとき、全馬が惠州の山路を騎乗運動していた。突然、山の中腹より攻撃を受けたが、治安地区として全員が武装なしで、私がただ一丁の騎銃に弾は二発しか持つていなかった。先頭は深野班長で三頭目くらいに補充兵の時岡一等兵が乗っていた。この馬の腹に敵弾が命中、馬は即死した。全員反転して全速力で本隊に向かったが、深野班長は時岡一等兵を自分の馬に

乗せて自分は徒歩のつもりであったが、私の乗馬を班長に渡し、指揮を取るようになった。二発の弾丸しかない小銃で、一発は敵に向けて発射したが、一発は万一に備えて残しておいた。間もなく本隊より救援にきてくれたので残した一発は使わずに済んだ。

五月の終わりころよりソ満国境が危険との風評が立ち、我が師団も反転行動を起こした。もちろん、制空権はアメリカに取られ、わが軍の飛行機は皆無に等しかった。これからが三南作戦で、贛州―吉安―南昌であり、夜行軍の連続であった。昼間は馬も民家に入れ、煙もださず我慢して耐え忍んだ。贛州は七月ころであったと思う。このころより腹の具合が悪くなり、回虫であろうと思ひ腰巻隊長に虫下しの丸薬を二粒頂いて完全に駆除することができた。

師団は贛江の左岸を北上し南昌へと行軍していたが、途中から敵の飛行機も来なくなり昼間の行軍となった。南昌の西山万寿宮に八月十七日に到着した。南昌は戦争の空気は全く見られず、他の部隊の兵も覇気がなく、無力化しており、だれ言うともなく戦争は終わった、終

戦で引き分けであろうといつていたが、時間の経過とともに日本は負けたということがだんだんと伝わってきた。

戦争、書き尽くせない数々の苦闘、我々は筆舌に表現できない事柄が山ほどある。しかし戦争ほど愚かなことはない。多くの犠牲になった戦友、あの軍馬、忘れることのない悪夢であった。

終戦後の集結地は無錫であった。この地において武装解除、もちろん軍馬も渡したのである。しかし中国の兵隊は日本の軍馬が大きくて近寄れないのであるが、特に中国軍の師団長、副官、主計ら高級幹部は日本馬にということ、その取扱いを日本軍に要請があり、中国兵に教えるということで我々伝騎の中より四名、四頭が中国軍に派遣され、私もその内の一人として中国軍と起居を共にした。もちろん、中国軍服を貸与された。場所は中国の軍司令部から百メートルくらいの民家の軒に我々四人と中国兵四人、軍馬四頭的生活が始まりました。

馬の手入れ、水飼い等は我々の仕事で、中国兵は馬

の近くにも寄り付けない状態で教えようがありません。しかし、我々の無錫城内での行動は中国軍服のため自由でした。なお食事も中国司令部の食堂で腹いっぱい給与で、しかも師団長の膳に付いた全然手の付けない副食が出されてびっくりもし、わが軍司令部の給与とは雲泥の差であった。

復員直前までこのようにして中国兵と起居を共にしておりましたが、中国兵の一人がマラリアにかかり、私どもに薬をくれと再三頼まりましたので、その中国兵を連れて我々の師団の衛生部に行き、キニーネを分けてもらい、中国兵に大いに感謝され、言葉は通じなくても互いに理解し和やかに過ごすことができました。戦争か平和か、今は亡き多くの戦友が築いてくれた、この尊い平和が隣国を友として繁栄することこそ、亡き戦友への饒はなむけであると思えます。

## 【解説】

執筆者小林氏は満州の第六八九部隊（騎兵第二十九連隊）に入隊し、十九年の初めごろ第二十七師団に転

属したという。

第二十七師団とは、歩兵四個連隊を三個連隊に改められたとき、豊橋の歩兵第十八連隊、奈良の第三十八連隊、松本の第五十連隊をもって編制された師団である。満州からマリアナ諸島、グアム、テナアン島に移駐し、玉碎した雷部隊である。したがって執筆者が述べるごとく毎日転属があったというが、南洋諸島では馬は不要となり、戦車隊が新設されたようである。言わば、残ればマリアナ諸島で玉碎全滅となったかもしれない故、今にして思えば幸運の星の下に生まれたといえるかもしれない。

次に転属した第二十七師団は、昭和十二年七月、支那事变勃発の主役、実は日、華両軍の間で共産軍が両方に発砲し、日華両軍の戦闘を誘発させたという証言が旧共産軍の当事者からあったことは自明のことである。

その当時の駐屯旅団を前身としたものが第二十七師団・極部隊である。その編制は、昭和十三年六月二十一日編制下令、七月二十五日南京において編制完結し

た。その主要戦は次のごとくである。

昭和一三・七・二九〜一二・二七

武漢攻略作戦参加、以後、河北省東半及び天津附

近警備

昭和一六・十二・八

大東亜戦争勃発、天津英・仏租界進駐

昭和一七・九・一〇〜一二・二〇

冀東地区肅正作戦参加

昭和一八・八・一〇 満州錦州省移駐

昭和一八・八・一一〜一九・三・一五

錦州・錦西・阜新・営口附近警備

昭和一九・三・一五 動員下令

昭和一九・三・二九〜五・一一 京漢作戦参加

即ち、大陸打通作戦参加のため満州関東軍より支那派遣軍に転属したことを意味している。この京漢作戦は

「コ」号作戦と称され、第十二軍によって発起、実施され、第一軍が策応したのである。

第十二軍の五月一日の命令の七に、

『第二十七師団八仁軍（十二軍）作令第七十一号二

拘ラス第三十七師団（冬部隊）、独立混成第七旅

団（北部隊）ノ許昌城内掃討間同地周辺ヲ包围シ

敵ノ脱出ヲ封止スベシ』

とある。同師団は五月二日、所在の敵を撃破、郟城

攻略後南下している。

その前、同師団は、黄河橋通過時間の統制に応ずるため、激しい強行軍を行い、地形、天候の不良もあり多数の落伍者や遅留人員（黄河北岸残置約二千人）を生ずる混乱をきたした。その後師団は極力損耗の回復を図りつつ南下し、五月五日、郟城を攻略した。続いて敵地区を突破し、連日の炎天下を確山に進出、兵力を集結して五月十一日、第十一軍（呂集団）の隷下に入った。

その後、第十二軍兵站すべてと離れ、独力突破するのだが、満州からの長途の行軍で兵は疲労を累積していた。しかし、確山、信陽間九十キロ、七〜八日間で突破することは難事ではなく旅次行軍とし、日中の炎熱を避け、夕刻より行軍を開始し、一晚平均十六キロを基準とした。

しかし、二度目の不幸は五月十二日夕、師団が行動を開始してから不測の事態によって起こった。渡河では自動車道以外は通過困難であり、三縦隊行軍の各部隊は終夜混乱し、收拾に時間を費やす。しかも、十五日は早朝のにわか雨により行軍部隊の大部分は全身濡れ、加えるに湿度と温度が高く行軍の疲労は回復できなかった。同日夕、日中の湿熱は激変して冷雨となり、強風が加わった。気温約一〇度、風速一〇メートルとなる。さらに道路は冠水し両側の田溝は急流となり、二カ所の橋は浮き上がり、車馬の通行は止められた。

行軍部隊は暗黒の中に停止、兵隊は立つたままの状態の中で雨激しく、前後の連絡もとれぬ。全身の冷気に耐えつつあったが、二十三時ごろ、行軍を放棄し各隊は適宜待避することに決したが、待避の場所も発見できず、人馬共に泥濘中に倒れ、車両部隊また進退極まり砲車にもたれ意識を失う。これらはまたつたく暗黒の中の出来事で、その確実な状況把握は十五日三時ごろであった。

調査結果では死者一六六名であり、なお救援と収容

が早急に必要とされた。事故の最も多かったのは山砲兵隊、歩兵砲隊であったという。第十一軍は、この事故にかんがみ各級幹部の指揮掌握の重要性を痛感し、特に「指揮官の部下の掌握について」との一文を同全軍に配布し注意を喚起したのである。これが「第二十七師団長台関付近の凍傷事故」の概要である。敢えて申すならば第二十七師団を湘桂作戦に間に合わせようとした方面軍の周到な運用と指導にもかかわらず不運にも重大な損耗を生じたのである。

師団はようやく漢口に到着し、駄馬編制となったが、湘桂作戦は同師団の十分な回復を待たず、五月二十六日から行動を開始した。したがって師団の改編、回復に使用できた部隊で六日間、最少はわずか一日であり、患者一、五〇〇人を病院に残して出発しなければならなかった。この事故が「長台関付近の凍傷事故」である。